

---

# 赤い水筒。

奥田徹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い水筒。

### 【Nコード】

N5134BA

### 【作者名】

奥田徹

### 【あらすじ】

小学生の遠足の時、赤い水筒をもらった。最初は気に入らなかったが、もう二十年ぐらい毎日持ち歩いている。

赤い水筒は僕がまだ小学生の頃。母親から、買ってもらった。

二十年経った今でも、当たり前のように使っている。

小柄で、ステンレス製の水筒。赤といってもワインレットで、少し趣と品がある気がして気に入っていた。

小学生の遠足の日、初めて渡された時は、漫画柄でも無く、子供用にしては少し可愛いが足りない気がして、不満だったが、担任の先生に

「オシャレな水筒だね。」  
と褒められてからお気に入りになった。

それから特に水筒を持ち歩かなくていい日でも、毎日鞆に入れていた。中身は決まって朝、母親に入れてもらった温かい緑茶だった。中学二年の頃、二ヶ月だけ持ち歩くのを止めたが、その後は、ずっと持ち歩いている。

思春期の頃、母親に緑茶を入れてもらうのが恥ずかしくて仕方なかった。

「今日は自分でお茶入れるから……」

それを朝、言う為に前日から緊張したのを覚えている。

自分で入れたお茶を持って学校へ行ったは良いが、その事に酷く罪悪感が残り、同時に寂しさが込み上げ、その日は、一口もお茶を口にする事をせず、帰り道に公園で蓋を開け、全部捨てた。

ベンチに座りながら、目の前の地面に染みたお茶を1時間ぐらい眺めていた。

次の日、食卓に置いた空の水筒に母親が緑茶を入れてくれたの

を確認した時、それを何も言わずに、持って外へ出る時、なぜだか心底ホツとしたのを覚えている。

都内の専門学校に行く事が決まって、実家を出る日の朝も水筒に緑茶を入れてもらった。

新幹線に乗りながら、田舎の景色が遠ざかり、次々と知らない景色が目映る中、赤い水筒から緑茶を飲んだ時、涙が出た。

不安や、感謝や、今までや、これから。時間は前に進む。僕も前に進む。

都内で一人暮らしして、自分で水筒の中身を入れるようになってから、色々変えてみた。

味噌汁を入れたら周りが面白がるだろうか？

本格的な烏龍茶を買ってきて、

「ちよつと飲んでみてよ」と薦めてみたり、

ただの水を入れて、

「今日はただの水だよ」と言ってみたり。

水筒に変わった飲み物を入れた日、部屋に戻ってから自分自身に嫌悪感を感じる事も少なくなかった。そういう日は、時間をかけて水筒を洗った。

そして最終的には少し温い緑茶に落ち着いた。

緑茶に戻して、何回か友人に、

「あれお茶なの？」

と聞かれた。

「うん、やっぱり緑茶なんだよ。」

就職して、恋人が出来て、部屋に毎日彼女が来てくれるようになってからは、彼女が緑茶をつくって入れてくれた。

「この水筒、凄く使い込んでない？」

「うん、小学生の初めての遠足の時から使ってるんだ。」

「そんな昔から？」

「それに緑茶を入れて持ち歩くのが好きなんだ。…変かな？」

「…ううん。そういうの好き。」

「良かった。」

彼女と喧嘩をした時、水筒を投げられ、下の方がへこんだ。僕はそのへこみを眺めながら、しょうがないかなと思っただが、そんな僕をよそに取り乱したのは彼女の方だった。

「ごめんなさい。ごめんなさい！」

彼女は水筒を抱え、撫でる様にしながら、何度も謝った。

後日、「水筒に嫉妬したのかな…変だよな。私も。」と彼女は言った。

彼女を連れて、実家へ帰った。母親と彼女はその水筒の話で意気投合し、へこみの時の話を聞いて、

「素敵なお嬢さんね。」

と気に入った様子だった。

帰り道、新幹線で母親が水筒に入れた緑茶を二人で飲んだ。

「あ、ちよつと違う。」

「ね？懐かしな…」

今週末、彼女に結婚を申し込む。  
その前に、新しい水筒を買いに行こうと思っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5134ba/>

---

赤い水筒。

2012年1月14日04時54分発行